Japanese Association for Religious Studies

けて個別的な人間を要求しない。この世界は、むしろ、間主観性を通して、三人称的世界になってしまう。

以上のような世界の二様態を確認した上で、神概念を振り返ってみる。二人称的世界を排他性、三人称的世界を包括性という言葉によって特徴づけたうえで、『我と汝』第四七節を見ると、ここでの神概念は、排他性と包括性が切りむすぶところで述べられていることがわかる。してみれば、ブーバーは、包括性によって特徴づけられる場所論的神概念を、排他性によって特徴づけられる二人称的神概念によって語り直そうとしているのではないだろうか。

そこで、本発表は次のことを提案したい。ブーバーの「永遠の汝」は、本質的に無人称的であるものを、二人称の「あなた」として受け取り直す試みだったのではないかということである。それは現代的に言い換えれば、場所論的神学をふたたび人格主義的神学へと取り戻す試みでもあったはずである。

ミシェル・アンリとキリスト教

古荘　匡義

晩年のミシェル・アンリ（一九二二―二〇〇二）の「キリスト教の哲学」では、彼が生涯をかけて構築してきた「生の現象学」が、キリスト教の聖書のことばと共に語られる。アンリ自身は自分の思索があくまで哲学であり、キリスト教を哲学へ還元しようとはしない。しかし、聖書の章句が生の現象学に並置されるとき、どうしてもキリスト教の哲学的解釈のようにみえてしまう。アンリがキリスト教を引用しながら生の現象学を提示する意義とは何であろうか。それは、聖書の章句とともに生の現象学が語られることによって、「キリスト教の哲学」が救済の理論であると同時に救済の実践にもなった、ということだと考えられる。

第一に、「キリスト教の哲学」は、エゴイスティックな人間の生の救済に関する理論である。人間の生は、自己自身から距離を取ることができずに根源的に自己を被る受容性において、自ら自己自身を体験し、自らを感情や行為として実在的に顕にする。しかし人間は、〈自分自身で生ける者となることはできず、真に実在的に体験しうるのは自分自身でしかない〉という「超越論的エゴイスム」に陥っている。このエゴイスムから「救済」されるには、自分自身で自己体験を始めることができる絶対的〈生〉の自己体験の過程に一体化して生きること、生ける者の生の「神化」が必要とされる。この神化は行為の次元において可能になる。すなわち、生ける者自身の我意に発するのではなく、「〈父〉の意志、すなわち絶対的〈生〉の自己-産出の過程」によって引き起こされる行いが、生ける者の生の「パトス的な内的自己-変容」を引き起こす。このような実存的変容を被った自己自身を根源的に体験することで、自分を超えたものにおいて生きていることを覚知し、エゴイスムから救済される。

第二に、「キリスト教の哲学」はエゴイスムからの救済の理論であるだけでなく、アンリ自身の実存の変容および救済の実践であるように思われる。

生の現象学的分析である「キリスト教の哲学」において、ア

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

ンリは基本的に、人間の生や絶対的〈生〉の存在や現実存在をカッコに入れて、生の現れの実在性を徹底的に追究する。しかし「キリスト教の哲学」には、ヨハネ福音書に関する議論を通して、絶対的〈生〉の絶対的現実存在（実存）に言及してしまう箇所がある。現象学的に見れば排除されるべきこの言及こそ、アンリ自身の実存変容の帰結を如実に顕にしているように思われる。

アンリの思想は、個人的体験や思想家との出会いによって根本的に変化することが多い。「キリスト教の哲学」に関しても、聖書の「再発見」という出来事によってアンリ自身の実存が変容し、そうして彼は「キリスト教の哲学」の諸著作を書くに至った、と彼自身ある対談で証言している。アンリにとって、聖書の再発見は、思弁的なレベルで聖書を新しく解釈したことではなく、自身の実存を変容するような、行為や実践のレベルにおける衝撃だった。先に述べたエゴイスムの救済理論に即して考えれば、この衝撃に促されて「キリスト教の哲学」を書くという一連の流れは、まさにアンリ自身のエゴイスムからの救済の過程であり、救済の実践だったのである。

そうであるなら、「キリスト教の哲学」にとって聖書のことばは必要不可欠なものである。アンリは、実存を変えた聖書のことばと、実存の変容の帰結である現象学的体系とを併記することによって、聖書との出会いがどのように自分の実存を変えたかをドキュメントとして表現しようとした。そうして、「キリスト教の哲学」は、エゴイスティックな人間の生の救済の理論かつ救済の実践となったのである。

理性と文化の関係について
――グローバリズム批判の視座を求めて――

八巻　和彦

ネオリベラリズムのイデオロギーならびにそれに強く影響された思想である「グローバリズム」Globalism は、技術的展開過程としてのグローバリゼーション Globalization を利用しながら、経済活動の標準を地球規模で均一化することによって、特定の勢力が世界中で経済的覇権を確立し、それを文化的支配、政治的支配にも利用しようとするものである。その標榜者たちは、その主張の根拠 Reason として、自分たちの理論こそが「合理的 rational」（つまり理性にかなっている、理性的）であるのだから、当然、それが地球規模で実現されるべきであるとする。そして、この思想の実践に反対する人々に対しては、「反グローバリズム運動は理性的なものではなく感情的反発に過ぎない」と、マスメディアなどが批判する傾向が強い。

確かに経済学には数学が応用されているが、当然のことながら経済学には数学以外の要素も存在しているのだから、数学のように地球規模での普遍妥当性を主張する根拠はないと言うべきであろう。そして、地球規模で軋轢を起こしているグローバリズムに理性的に反論するためには、理性というものについて冷静な考察が必要とされるだろう。そこで、本発表では、「理性と文化の関係」に照準を当てて考察を進める。

そもそも「理性」という人間の精神的能力を単独で取り出すことができて、それに対して「感情」という人間の精神的能力が存在しているのだろうか。清水哲郎（『事典　哲学の木』）も

NII-Electronic Library Service